大阪におけるテ敬語の消長

―大正・昭和初期の小説を資料として―

村中淑子
桃山学院大学
tmuranaka@andrew.ac.jp

Te-Form Verb with the Meaning of the Honorific in Novels of the Taisho Era and the Early Showa Era

MURANAKA Toshiko
St. Andrew's University
Key Words: Osaka Dialect, Treatment Expressions, Haru-Form, AOZORA BUNKO, HIMAWARI

1　はじめに

現在、大阪方言における上向きの待遇表現として代表的なものは、ハル敬語であろう（郡 1997: 40）。一方、いわゆる「テ敬語」については、近世の大阪では盛んに使われていたようであるが、現在の大阪ではほぼ使われていない。金沢(1992)によれば、大阪におけるテ敬語は「江戸前期に発生したものが、江戸後期から明治期にかけて比較的広く用いられるが、大正から昭和初期において、かなり急速に終息の方向に向かったらしい」とのことである。村上(2009)も「大正以降、大阪や京都といった近畿中央部では「テ＋指定辞」は用いられなくなる」という。

その「大正から昭和初期」にかけて「急速に終息の方向」に向かっていく大阪のテ敬語の具体的状況を、当時の小説を手がかりにして探る、というのが本稿の主な目的である。

2　先行研究

以下では、おおよそ「近世の上方」「近世の江戸」「現代の全国分布」「現代の大阪」の順で、テ敬語に関する先行研究の調査を紹介していく。近世の説明の末尾に明治期のものも含める。

近世上方の言語使用におけるテ敬語[1)]の存在については、まず湯沢(1936)や山崎(1963)に記述がある。湯沢(1936)は、近世前期の京阪地方の口語を当時の歌舞伎狂言本・浄瑠璃本を資料とし

て調べたもので、テジャ・テデアロウ・テナラ・テカを含む文例が挙げられている。山崎(1963)は、上方の近世語の待遇表現の体系を歌舞伎狂言本・浄瑠璃本や洒落本・滑稽本などを用いて追究したもので、テジャ・テデ・テナラ・テカ・テゾなどの形を挙げている。湯沢は、これらの形について、テの下の用言を略した言い方であるとのみ述べているが、山崎は、テイルの意のテジャはテイラルルジャと同価値であり、省略形が特別の待遇価値を持つに至ったものと述べる。

近世後期の上方の洒落本における敬語表現を分類し数え上げたものとしては、奥村(1965)・矢野(1976a)(1976b)・辻(2009)・村上(2014)などがあり、いずれもテ敬語を含む。矢野(1976a)は、洒落本類においては時代が下るに従ってテ敬語が増加する傾向にあると述べ、矢野(1976b)は、テ敬語は男女・階級の区別なく全体の作品に一般的に使用されているという。洒落本以外をみた論としては、矢野(1978)が滑稽本を資料としており、洒落本よりも滑稽本では男性のテ敬語使用が目立つという。彦坂(1984)によれば、近世後期上方の雑俳資料にもテ敬語がみられるという。

近世上方におけるテ敬語に的をしぼった研究には奥村(1951)・山本(1990a)・村上(2006)・村上(2009)があり、このうち奥村(1951)・山本(1990a)・村上(2006)は成立事情の観点から論じている。山本(1990a)は浄瑠璃・歌舞伎・洒落本・噺本、村上(2006)は絵入狂言本と近松世話物を精査している。村上(2009)は変遷という観点から浄瑠璃・洒落本・噺本の用例を調べ、テ敬語の変遷を、テイナサルや明治以降のハルと関係づけている。

次に、近世だけでなく明治期を含んだ論として、辻(2009)と金沢(1992)を簡単に紹介する。

辻(2009)は、京都板洒落本を詳細に調べた結果から、近世後期の京都において、特に女性話者が第三者待遇でテ敬語を使用することが多いと述べる。辻は、近世に続く明治期の京都については、落語関係資料を分析し、そこでのテ敬語はごく低頻度であること、また、明治期には男性話者の使用や話し相手待遇の使用の例も見られることを示している。

金沢(1992)は、特に明治期のテ敬語の変化を詳しく分析している。まず江戸末期（『穴さがし心の内そと』）では、使用のほとんどが女性で、話し相手待遇よりも第三者待遇がはるかに多いこと、明治中期（落語速記本）では、女性に使用が多く、第三者待遇の方がやや多いこと、明治後期（落語 SP レコード）では、女性の使用が多いが男性の使用もあること、話し相手待遇が多くなっていること、待遇の対象が同等または下位の対者に広がっていること、が述べられている。

さて上方から江戸へ視点を移すと、近世後期の江戸の言葉については、湯沢(1954)に記述がある。江戸の小説・歌舞伎脚本・落語等の用語を観察したもので、テデゴザリマス等の形が挙がっている。ここで湯沢は、テの下に「いらっしゃる」などが略されたものであろうと述べ、敬語表現であることを認めている。文例の出典は「遊子方言」「浮世風呂」「浮世床」「花筐」である。土屋信一(1986)は、「浮世風呂」と「浮世床」に現れる「てでございます」について検討し、「江戸の町人の中で、かなり上品な言葉づかいの女性が使う敬語であった」という。すなわち土屋は、テ敬語は上方由来であるが江戸語としても用いられていた、としている。山本(1990b)は、江戸の洒落本・噺本・滑稽本を検討した結果、テ敬語は上方から流入してきたものに過ぎず、「江戸語として根づき、発展してゆく素地を持ち得なかった」「山田美妙の時代物の小説や明治初期の口

語体小説の一部に、その末裔が見られるが、現代に至ってはもはや関東にその影すらない」「ただし、知識層では東西を問わず使われていたと見るべき」と結論づけている。

江戸のことばにおけるテ敬語を取り上げたものは、上記以外には見つからなかった。田中(1973)は、文化・文政期の江戸語の敬語表現を、敬意の段階別に3種に分けて挙げており、接頭語のオ・ゴやイタス、シャル敬語、ナサルとその派生形など、多くの語形を挙げているが、テ敬語にあたるものはみられない。辻村(1974)は、明治期と大正期の敬語について概観し、オ（ゴ）～ニナル、オ（ゴ）～ナサル、イラッシャル等が取り上げているが、テ敬語にあたるものは扱われていない。飛田(1974)・進藤(1974)・林(1974)・中村(1974)・森田(1974)・興津(1974) のいずれも、明治・大正時代の敬語に関係した論であるが、テ敬語は取り上げられていない。

明治期・大正期のテ敬語についての論考は、上記に挙げたもの以外に見つからなかった。

昭和の戦後においては、全国分布の中にテ敬語が見られるものとして、藤原(1978)と『方言文法全国地図　第6集』(2006)がある。藤原(1978)は、テ敬語をおおよそ関西的分布であるとし、九州の一部・中国・近畿の主に北部・北陸の一部への広がりを文例とともに示している。別冊附図第4図としてテ敬語の全国分布図もある。『方言文法全国地図』では、273図・283図・285図・295図などにテ敬語の出現がある。石川・福井・京都北部・兵庫・岡山・島根・広島・山口・福岡まで分布し、大阪府・奈良県・和歌山県・三重県には見られない[2)]。

現代の大阪中心地域につながるものとしては、楳垣(1955)が船場言葉としてテ敬語を挙げている[3)]。現代の大阪府の状況は、岸江・中井・鳥谷(2009)で確認できる。対者目上（項目87）・第三者目上（項目88）・親しい目上（項目92）にはテ敬語は見られない。しかし対者目下（項目100）および第三者目下（項目101）で、府北部の豊能郡や箕面市に、キチャッタ・キテヤッタの形がある。豊能郡能勢町にテ敬語があることは佐藤(1972)も取り上げている。

以上の先行研究から、時代ごとのテ敬語の有無とその根拠となる資料について示したのが表1である。表2には、テ敬語のもつ性質の変化を大まかに示した。

表1　近世～現代のテ敬語の有無とその根拠（先行研究による）

	上方	上方の周り	江戸（東京）
近世前期	●　浄瑠璃本　歌舞伎台本	？	？
近世後期	●　洒落本　噺本　滑稽本　雑俳	？	●　洒落本　噺本　滑稽本
明治期	●　落語資料	？	△　小説
大正期	？	（有り？）[4)]	？
昭和期・戦前	？	（有り？）	？
昭和期・戦後	×　臨地調査 （ただし府北部のみ有り）	●　臨地調査	×　臨地調査

（●は使用あり、×は使用なし、△は言及のみあり）

表２　テ敬語の性質の変化（先行研究による）

	近世末期　→　明治期（上方）	近世末期　→　明治期（江戸）
話者	女性　→　女性・男性	上品な女性　→　知識層（？）
待遇の対象	第三者待遇　→　第三者待遇・話し相手待遇 上位　→　上位・同等・下位	？

表１から、テ敬語の有無が確認されていない時期・地域がわかる。特に上方において、明治期までは普通に使われていたのに昭和後期にはほぼ見られない、という落差が目につく。そこで本稿では、大阪の大正期・昭和前期のテ敬語の出現について調べることにした。合わせて、東京方面における大正期・昭和初期のテ敬語の状況についても、ごく一部ではあるがみることにする。

3　資料と方法

大正期・昭和前期の大阪方言を調べるための資料として、その当時に発表された小説を用いることとし、検索の利便性から、『青空文庫』パッケージ（20160401）[5]を利用した。

テ敬語の検索に用いた「検索文字列」は次の４通りである[6]。筆者ごとの検索結果を Excel に取り込んだ後、目視でゴミ取りを行なった。

[てで][でだどかや]、[てゞ]、[でゞ]、[てで][じぢ][やゃ]

比較のため、ハル・ヤハル・ナハルの活用形も検索した。その際の「検索文字列」は次の２通りである。同じく筆者ごとの検索結果を Excel に取り込んだ後、目視でゴミ取りを行なった。

は[らりるれろんンっッつツ]、[なナ][はハ][いイ]　[7]

『青空文庫』パッケージから、上司小剣・水上滝太郎・織田作之助の作品をデータとした。

表３　大阪方言データとして用いた作品の筆者

	生年	没年	成人前の在住地	『青空文庫』パッケージにおける総文字数
上司小剣	1874（明治７）	1947（昭和22）	奈良→大阪	203379
水上滝太郎	1887（明治20）	1940（昭和15）	東京	244346
織田作之助	1913（大正２）	1947（昭和22）	大阪市	1048776

この３人を選んだ理由は、次の通りである。

(1) 『青空文庫』パッケージを用いて「まへん・まっせ・まひょ・まっしゃろ・でっしゃろ」等の伝統的大阪方言の検索を行った結果[8]、それらの使用の多かった作家の第1位から第3位が、織田作之助、水上滝太郎、上司小剣であった。すなわち『青空文庫』パッケージに含まれる作品群の作者の中で、大阪方言を多用しているのがこの3人であると考えられた。

(2) 上司小剣の作品は、村上(2010)等でも大阪方言資料として使われている。

(3) 織田作之助は、村中(2015b)の注7にもある通り、同じ大阪方言ネイティブの小説家である宇野浩二からも、作品中の大阪弁が巧みであることについて高く評価されている。

(4) 水上滝太郎は東京出身であるが、30代で大阪へ赴任してまもなく、大阪を舞台とした小説を書いている。このことから、大阪以外の地域方言の影響はほぼ受けておらず、その作品中に大阪方言が出現した場合、関西周辺の他の方言が混じっている可能性が低いのではないかと考えた。

それぞれの作品で『青空文庫』パッケージ（20160401）に収められているものは次の通り。

・上司小剣　9作品（鱧の皮、石川五右衛門の生立、ごりがん、太政官、父の婚礼、兵隊の宿、東光院、死刑、天満宮）　文字数合計203379

・水上滝太郎　5作品（山を想ふ、貝殻追放、山の手の子、覚書、大阪の宿）　文字数合計244346

・織田作之助　65作品（土曜夫人、競馬、木の都、夫婦善哉、六白金星、青春の逆説、世相、聴雨、秋の暈、猿飛佐助、大阪発見、馬地獄、アド・バルーン、蛍、四月馬鹿、道、可能性の文学、昨日・今日・明日、鬼、髪、郷愁、勝負師、神経、中毒、道なき道、妖婦、吉岡芳兼様へ、大阪の可能性、終戦前後、起ち上る大阪、武田麟太郎追悼、東京文壇に与う、土足のままの文学、文学的饒舌、猫と杓子について、僕の読書法、わが文学修業、私の文学、大阪の憂鬱、天衣無縫、雪の夜、それでも私は行く、夜光虫、夜の構図、秋深き、ヒント、眼鏡、経験派、好奇心、妻の名、実感、十八歳の花嫁、星の劇場、電報、報酬、民主主義、面会、薬局、旅への誘い、ひとりすまう、婚期はずれ、雨、俗臭、放浪、四つの都）　文字数合計1048776

なお、方言資料としての文学作品については、村中(2015a)で述べていることを要約すると、次のとおりである。

話し言葉の実態をよく反映する資料は、自然会話の録音とその文字化資料であろうが、それが得られない場合は、文学作品をデータとするのも有効である。しかし文学作品における方言は実態に即していないこともある。その要因は、(1)作品の受け手が他地域出身者である可能性を慮り、理解しやすさのために方言的特徴を減らしている、(2)わかりやすい人物造型のために、作品の受け手が持っていると想定される、当該方言に関するステレオタイプに合わせている、(3)当該方言の音声的特徴は聞き慣れていても、文字にしたものは見慣れていない読者が多いので、読みやすさのために、音声的特徴の忠実な文字化ではなく、文章語の規範的な形に近づけている、などが考えられる。

文学作品を用いる場合は、以上のことに注意を払う必要がある。

4　結果と考察

4. 1　使用度数

『青空文庫』パッケージ（20160401）において３人の筆者の作品を検索して得られた、テ敬語の使用度数を、ハル敬語の使用度数と比較しながら示すと、表４のようになる[9]。

表４　３名の筆者におけるテ敬語とハル・ヤハル・ナハルの数

	テ敬語	ハル	ヤハル	ナハル	ハル・ヤハル・ナハル計	総文字数
上司小剣	3	51	46	90	187	203379
水上滝太郎	7	62	54	23	139	244346
織田作之助	2	124	18	80	222	1048776

テ敬語は３人ともに使ってはいるが、ごく低頻度である。おそらくは、ハル敬語にとってかわられた実社会での状況が小説にも反映されて、このような結果になったものと考えられる。

次節 4.2 では上司小剣、4.3 では水上滝太郎、4.4 では織田作之助の、テ敬語の文例をすべて挙げていき、どのような文脈でテ敬語が使われているかを観察し、4.5 でまとめの表を提示する。文例はできるだけ初出の年代順に並べる。文例の表記は、仮名遣いも含めて『青空文庫』パッケージからの引用そのままである。漢字の読みについては適宜、『青空文庫』の原文を参照する。

4. 2　上司小剣の場合

上司小剣の９作品中３作品に１つずつ、計３例のテ敬語がみられた。

【上司①】　竹丸は早や立ち上つて出口の扉に手をかけた。「そんならもう去んでだすか。」　何もかも諦めたといつた風で、京子は苦しさうな笑顔をしたが、　（「天満宮」1914 大正 3）

病気で入院中の京子が、見舞いに来た息子の竹丸（12 歳）とその連れである千代松（知り合い、50 歳くらいの男性）に向かって話す場面である。原文には「去」に「い」とルビが振られている。動詞「イヌ」（「去る」の意）のテ形「インデ」に丁寧体の助動詞「ダス」と終助詞の「カ」がついた形である。京子は竹丸一人に向かっては、「竹は今夜泊まつて行くなア。」「そんなら早う去に。」のように非丁寧体で話しているので、丁寧体の「ダス」を含む「いんでだすか（お帰りになるのですか）」は、竹丸と千代松の二人に話しかけたもので、「イヌ（去る）」の主体は、竹丸と千代松の二人であろう。テ敬語の使用は千代松を意識してのことと思われる。

【上司②】　「この人のお父つあんとは、矢つ張りこのくらゐ年が違うたが、意氣合てでなア。この人のお父つあんは學問はなし、碁は打たず、盆栽は知らんし、酒を飲む外に能のない老爺やつたが、それで別に話の面白い男でもなかつたのに、わしはあの漢が好きでなア、

（「ごりがん」1920 大正 9 [10]）

主人公の郷里に住む「気の置けぬ老僧」が、主人公とその妻に向かって、主人公の父（神主）を話題にして話すところである。原文をみると「意氣合」の部分に「うまあふ」とルビがある。「うまおうてでなあ（ウマがあっていてね）」である。動詞のテ形「おうて（合って）」は主人公の父を主体としたものであろう。

【上司③】　「もう、いて來ました。……お金はこれだけ、これは家の阿母さんに貰うて來ました。賣つてお金にして、餘つたのを持つて戻れというてだした。」と、文吾は平氣な顔をしてお金と玉とを出した。　（「石川五右衛門の生立」1920 大正 9）

文吾（母と二人暮らしの子供）が、伊勢参りの仲間である源右衛門（同じ村の百姓、51 歳）に向かって話す場面である。文吾は「賣つてお金にして、餘つたのを持つて戻れ」と母から命じられたという。つまり「いうてだした（おっしゃっていました）」の主体は、自分の母である。

4. 3　水上滝太郎の場合

水上滝太郎は 5 作品中 2 作品にテ敬語が見られた。7 例のうち 6 例が「大阪の宿」である。

【水上①】「今晩は、お久しうおまんな。」とお白粉を塗つた給仕の女は少年を見て挨拶した。「近頃は××は來ないか。」　「つい昨日も見えてでした。」

（「貝殻追放　013 先生の忠告」1919 大正 8）

「貝殻追放」は随筆である。筆者水上をたびたび訪ねてくる 18、9 歳の少年（甲種商業學校の五年生、作家志望）が、ある時「道頓堀（大阪ミナミの中心地）の北河岸の西洋料理屋兼カフヱ」に水上を連れていく。そこの「給仕の女」が、少年に向かって話す中に、テ敬語が出現する。「昨日も見えた」のはこの少年の友人であり、「給仕の女」（年齢不詳）が、常連客である少年の友人がこの店に来たことについて、「みえてでした（いらっしゃっていました）」と表現している。

【水上②】矢張笑つてゐる。笑の外に表情の無いやうな顔であつた。　「あんさんもたんと上つてだつか。」　「先づたんとの方だらうねえ。」　「ほしたら御書に一本つけましよか。」

（「大阪の宿（一の四）」1925 大正 14〜1926 大正 15）

「大阪の宿」は小説であるが、主人公の三田（三十過ぎ、独身）は水上自身をモデルとしているようで、会社員だが新聞に連載小説を書いており、小説の冒頭では、東京から大阪に赴任して半年経った、という設定である。例の②は、大阪での住居として土佐堀（大阪キタの中之島南側）の旅館に引っ越した次の日に、そこの女中（おつぎという名である）と話している場面である。女中が主人公に向かって「あんさん」と呼びかけ、「たんとあがってだっか（たくさんお酒をお飲みになるのですか）」と尋ねている。「あがる（「飲む」の敬語）」のテ形に丁寧体の助動詞「ダス」と疑問の終助詞「カ」がついて、「あがってだっか」となっている。

【水上③】「三田さん、あんたその娘さんに、毎日道で逢ふてゞすの。」
（「大阪の宿（三の六）」）

これも②の例と同じく、宿の女中（3 人の女中のうち誰であるかは文脈から不明）が主人公に向かって話しかけており、「おうてですの（会っていらっしゃるのですか）」と尋ねている。

【水上④】顔馴染の年とつた仲居頭が出て來て、奥の座敷に案内した。「今に田原が來る。それ迄僕は寢てゐるから、何も構はないでくれたまへ。お茶もいらない。枕もいらない。」「社長さん見えてゞすの。ほしたらあちらさんが御出でやしてから御酒だんな。」三田の氣性を呑込んでゐる仲居は、客をうつちやらかして引込んでしまつた。（「大阪の宿（五の二）」）

主人公の三田が、長編を書き上げて原稿料が入った直後に、新地（大阪キタの歓楽街）のお茶屋に行った場面である。「年とつた仲居頭」が三田に向かって、三田の学生時代の友人で会社の重役である田原（社長ではない）があとから来ることについて、「みえてですの（いらっしゃるのですか）」と確認している。

【水上⑤】「昨晩はえらい醉ふてゞしたなあ。おもてをどんどん叩かはるよつて、くゞりをあけると、まあどうでつしやろ、むうつと御酒のかざがして、べゝはぐしやぐしやに濡れてあるし、えらいこつてしたぜ。」 三田の枕もとに坐り込んで、おつぎはさも面白さうに笑ふのだつた。
（「大阪の宿（六の一）」）

宿の女中の「おつぎ」が主人公三田に向かって、昨晩の三田の酔態について、「えらい酔うてでしたなあ（ずいぶん酔っていらっしゃいましたね）」とからかっている場面である。

【水上⑥】水に近い食臺を占めた二人のところへ、年増の女中が來て挨拶した。「旦さん、あんた何あがつてだつか。酢蠣いひまほか。」「何でも君の好きなものをあつらへてくれ給へ。」おつさんはあれこれと自分の好みを云つた。（「大阪の宿（九の五）」）

主人公三田が、宿の「おつさん」（旅館の女将の母方のおじ）と二人で、牡蠣料理の店に行って注文をし始めるところである。「おつさん」は物語の最初には「ぢいさん」として登場するが、周囲からは「おつさん」と呼ばれている。宿の客である三田に向かって、「何あがってだっか（何を召し上がりますか）」と尋ねるところにテ敬語が使われている。

【水上⑦】「今日は大層遅い御歸りですな。何處ぞへ寄つて來てゞしたの。」　宿の格子をあけると、靴を脱ぐひまも無く、おつぎが出て來て訊いた。　（「大阪の宿（十三の六）」）

宿の女中のおつぎが主人公三田に向かって、「どこぞへ寄って来てでしたの（どこかへ寄って来ていらっしゃったのですか）」と尋ねている。

4. 4　織田作之助の場合

織田作之助については、65 作品中 2 作品に 1 つずつ、テ敬語がみられた。

【織田①】「まアまア、今夜は酔うてやどすさかいその話はまたあとで……」　桔梗家のおかみは、君勇の手前（というのは、小郷から君勇を世話してくれと頼まれて、その旨君勇の耳に通じて置いた手前）もあり、一応柔く断って置くことにした。
（「それでも私は行く」初出「京都日日新聞」1946 昭和 21）

桔梗屋（京都先斗町の茶屋）のおかみが、無茶な要求をしてきた客の小郷虎吉（五十男、元軍需会社の幹部、戦時利得者）をなだめている場面である。「酔うてやどすさかい（酔っていらっしゃいますから）」は、テ敬語の形「酔うてや」に京都方言の丁寧体の助動詞「ドス」と理由を表す接続助詞の「サカイ」がついたものである。

【織田②】次郎と三郎は豹吉を追いくたびれて、というより、豹吉の姿を見失って、難波の闇市の食堂の軒先にある職場へ戻って来た。「なんぜ待ってくれへんかったんやろなア」「逃げんでもええのになア」「なんぜ逃げるんやろなア」「わいらに掴まったら、もう一ぺんハナヤをおごらされる思てやろか」「阿呆ぬかせ」と、言って、ふと声をひそめて、
（「夜光虫」初出「大阪日日新聞」1947 昭和 22）

大阪難波の闇市近くで靴磨きをしている、次郎と三郎という小さな兄弟の会話である。18 歳の豹吉を大将あるいは兄貴と呼んでいるので、次郎と三郎は 10 代前半くらいと思われる。「あほ抜かせ（バカを言え）」と言うのは兄の次郎だと考えられるので、直前の「わいらに掴まったら、もう一ぺんハナヤをおごらされる思てやろか」は弟の三郎のセリフであろう。ハナヤは喫茶店の

名前であり、豹吉はこの日の昼間、初対面の二人に奢ってくれたのであるが、夜に再び出会った時は、二人の前を走って逃げてしまったのである。つまりこの「思てやろか」がテ敬語であるとすると、三郎が豹吉を待遇の対象として使ったものである。

4. 5　上司・水上・織田データのまとめ

以上、上司小剣、水上滝太郎、織田作之助の作品中にみられるテ敬語について、一つ一つの文例を検討した。それらをまとめたものが次の表 5 である。

表 5　テ敬語の話者と待遇の対象

筆者と作品初出年	話者	待遇の対象はどんな人物か	話者からみた待遇対象	話し相手待遇か第三者待遇か
上司①1914 大正 3	中年女性	50 歳位の男性	知り合い	話し相手
上司②1920 大正 9	老僧	同年輩の男性	友人	第三者
上司③1920 大正 9	少年	自分の母親	実母	第三者
水上①1919 大正 8	給仕の女	年下男性	店の客	第三者
水上②1925 大正 14	宿の女中	30 過ぎの男性	宿の客	話し相手
水上③1925 大正 14	宿の女中	30 過ぎの男性	宿の客	話し相手
水上④1925 大正 14	茶屋の仲居	30 過ぎの男性	客	第三者
水上⑤1925 大正 14	宿の女中	30 過ぎの男性	宿の客	話し相手
水上⑥1925 大正 14	宿の老人	30 過ぎの男性	宿の客	話し相手
水上⑦1925 大正 14	宿の女中	30 過ぎの男性	宿の客	話し相手
織田①1946 昭和 21	茶屋の女将	50 歳位の男性	客	話し相手
織田②1947 昭和 22	少年	18 歳の男性	通りすがり	第三者

文例がごく少ないが、今回のデータ範囲におけるテ敬語の性質としては、次のことが言えよう。

(1) 性別・世代に関わらず、様々な話者によって使われる。

(2) 第三者待遇にも話し相手待遇にも使われる。

(3) 待遇の対象は、「客」のような気をつかうべき上位の相手の例が多いが、会ったばかりのよく知らない人間（織田②）や、自分の実母、気の置けない友人、の例もある。

以上のことから考えると、表 2 でまとめた状況、すなわち金沢(1992)で述べられていた明治後期の大阪、あるいは辻(2009)の明治期の京都の状況と、よく似ている。よって、大正期の大阪においては、頻度こそ相当に低いものの、使われ方としては、明治後期とあまり変わりがなかったものと推測される。

4. 6　明治期・大正期・昭和初期の東京方面の状況

『青空文庫』パッケージの検索は、以上のように筆者を指定した上で行ったほか、いくつかの文字列（テデ／デデ、テジャ／デジャ）については、筆者指定なしでも検索してみた。すると、東京方面を中心とした筆者による、テ敬語らしきものが一定数見つかった。網羅的な調査はできていないが、いくつかを例示し、考えられることを簡単に述べておく。

2 章で紹介した山本(1990b)の、テ敬語は「山田美妙の時代物の小説や明治初期の口語体小説の一部に、その末裔が見られるが」という記述の通り、次のような例がある[11]。

【山田美妙　1868 慶応 4　東京】
敵はまぢかく近寄ッた。「動くな、落武者。知らぬか、新田義興は昨日矢口で殺されてじゃ」
（「武蔵野」1887 明治 20）

山田美妙はこの小説の冒頭で「この武蔵野は時代物語ゆえ、まだ例はないが、その中の人物の言葉をば一種の体で書いた。この風の言葉は慶長ごろの俗語に足利ごろの俗語とを交ぜたものゆえ大概その時代には相応しているだろう。」と書いている。時代物の口調を工夫した文体の一部をなすものとして、テ敬語を用いたらしい。これにならったらしい、ほかの筆者による、時代小説におけるテ敬語の例が複数みられた。次に示す。

【長与善郎　1888 明治 21　東京】
「（略）それが又和服で、しかもお役人らしい羽織袴を着てぢや。」
（「青銅の基督―　一名南蛮鋳物師の死」1923 大正 12）

【吉川英治　1892 明治 25　神奈川】
「お吟どのを知ってじゃろ」　（「宮本武蔵」1935 昭和 10）

【佐々木味津三　1896 明治 29　愛知】
「でも、これなる黙山の申すには、兄を討った者は、そなたの名まえ同様、くまと名がつくというてじゃぞ」　（「右門捕物帖」初出年不明）

つまり山田美妙のあとにも、大正期、昭和期まで、時代小説において、古めかしさを表すためか、テ敬語が用いられているのである。そのほかに、翻訳におけるテ敬語の使用例がある。

【坪内逍遥　1859 安政 6 生　岐阜】
①　「乳母　　では、なう、急いでロレンス様の庵室まで往かっしゃれ。あそこでお前を内室に

なさるゝ人が待ってぢゃ。」
② 「ヂュリ　いゝえ／＼。其様な事は、もう夙に知ってる。婚禮の事をば何と言うてぢゃ？」
③ 「ロミオ　（略）わしの内密妻は破れた互ひの誓文を何と言うてぢゃ？」
（「ロミオとヂュリエット」シェークスピアからの翻訳）

翻訳における歴史物、といった味わいを狙ってテ敬語を使ったのであろうか。乳母だけでなく、ごく若いジュリエットとロミオのセリフにも、テ敬語が出てくるところが興味深い。同じ翻訳ものとして次の例がある。これは女中の例のみであった。

【水谷まさる　1894 明治 27　東京】
女中のハンナがあらわれ、「おくさまが、みなさんに、夕飯に階下へ来るようにとおっしゃってです。」と、いいました。（「若草物語」オルコットからの翻訳）

また、山本(1990b)のいう「明治初期の口語体小説の一部」の例が次のようなものであろう。

【尾崎紅葉　1867 慶応 3　東京】
「さうして明日、五時頃些とお目に掛りたいから、さう申上げて置いてくれと有仰つてで御座いますものですから、さう申上げに参つたので御座いますが、それぢやまあ、那辺へいらつしやいましたらう！」（「金色夜叉」1897 明治 30）

【木下尚江　1869 明治 2　長野県松本】
「姉さん、篠田さんも其ことを心配してでしたよ」（「火の柱」1904 明治 37）

これらの例はすべて、現代の方言地図で見るとテ敬語の無い地域出身の作家によって使われたものであり、東京を中心とした小説家によるものといってよいだろう。以上のことから、明治期以降のテ敬語については、次のような可能性が考えられる。

(1) 時代小説においては、時代物の雰囲気を出すために、昭和期に至るまで使われていた。
(2) 明治期の小説では、必ずしも方言としてでなく普通の丁寧な言葉遣いとして使われていた。
(3) 翻訳小説においても、何らかの効果を狙って使われていた。

今回網羅的には見ることができていないが、少なくとも小説においては、明治期から昭和期にかけて、テ敬語がかなり使われていた可能性もある。西日本での実態と異なり、フィクション用語としての使用の可能性もあるが、今後、じゅうぶんな調査を進める必要があろう。

5　まとめ

先行研究によれば、大阪（中心部）では、明治期まではテ敬語が存在したが、昭和後期（戦後）にはほぼ使われなくなっており、その間の大正から昭和初期にかけては、急速に衰えたということのみ記述されていて、実態が明らかでなかった。

本稿では、大正・昭和初期の大阪におけるテ敬語の実態を、『青空文庫』パッケージに含まれる作品群のデータを用いて探った。その結果、大正期から昭和初期にかけての大阪で、テ敬語は出現頻度はごく低いものの、完全に消えたわけではなく使用されていたらしいことが示唆された。2 章の表 1 に本稿の調査結果を加えると、次のように書きかえられる（書き換え箇所をアミカケ）。

表 6　近世～現代のテ敬語の有無とその根拠（先行研究＋本稿調査）

	上方	上方の周り	江戸（東京）
近世前期	●　浄瑠璃本　歌舞伎台本	？	？
近世後期	●　洒落本　噺本　滑稽本　雑俳	？	●　洒落本　噺本　滑稽本
明治期	●　落語資料	？	●　小説（効果狙いか）
大正期	●　小説（実態を写すか）	（有り？）	●　小説（効果狙いか）
昭和期・戦前	●　小説（やや疑問が残るか）	（有り？）	●　小説（効果狙いか）
昭和期・戦後	×　臨地調査 （ただし府北部のみ有り）	●　臨地調査	×　臨地調査

（●は使用あり、×は使用なし）

大正期の上方については、上司小剣と水上滝太郎における使われ方から考えて、おそらくテ敬語が実在したと言ってよいのではないかと考える。数は少ないが、さまざまな登場人物によって使われる設定になっており、一部の話者の特殊な用語、というわけではないように思われる。当時、テ敬語はハル敬語の圧倒的勢力に押されていたとしても、外来の水上滝太郎の耳に止まる程度にはまだ実際に使われていたのではないか。

ただし、昭和戦前期の織田作之助の例には、やや疑問が残る。ハル敬語の数の多さに比して、あまりにもテ敬語が少ない。それに、【織田①】の例は、京都のお茶屋の女将のセリフであるが、作之助の方言使用意識の明確さ・鋭さから考えると、テ敬語を京都方言として登場人物に使わせていた可能性もないではない。また、【織田②】の例の「もう一ぺんハナヤをおごらされる思てやろか」は、ここではテ敬語として数えたが、「おごらされると思って（逃げたの）だろうか」というような、原因・理由を表す接続助詞テであると取れなくもない。とすれば、作之助は大阪方言としてはテ敬語を登場人物に使わせなかった、という可能性もあるのである。昭和期・戦前の大阪方言資料をさらに探して確認する必要があるだろう。

6　おわりに

今回は、大正期・昭和前期の大阪のテ敬語に焦点をあてて、小説を資料として考察した。機会を改めて、京都のテ敬語についても、小説を資料として論じたい。

---

1) 先行研究においては、ほぼ同じものをさして「テヤ敬語」あるいは「テ＋指定辞」と呼んでいる場合も多いが、本稿では「テ敬語」という用語で統一しておく。また、時代名称については、引用部分を除き、「江戸期」ではなく「近世」と呼ぶことにする。すなわち本稿では、「江戸の言葉」と言った場合、「江戸」は時代ではなく地域をさすことにする。

2) ただし藤原(1978)の附図第４図では、大阪府・奈良県・和歌山県・三重県にもテ敬語の分布ありとなっている。また佐藤(1972)によれば、北三重にテ敬語が存在するとのことである。

3) 楳垣はテ敬語について「大阪方言でもかなり広く使われていて、船場特有のものではない」と述べているが「かなり広く」が具体的にどこを指しているのかは不明である。

4) 昭和後期（戦後）に上方周辺の各地でテ敬語が使用されているのは『方言文法全国地図』をはじめとした各種調査から明らかであり、それらが元々は上方から広がったものであると考えれば、上方でテ敬語が急速に失われ始めたとされる大正期には、すでに、上方周辺において、テ敬語が使われ始めていたであろうことが推測される。

5) 『青空文庫』パッケージ（20160401）は『青空文庫』の作品（12545作品）を『ひまわり』用にインポートしたデータで、国立国語研究所の山口昌也氏によって作成されたものである。2016年4月6日公開版を使用した。

6) この４通りの文字列により、「～てか（でか）」（テ形に終助詞カの接続した形）や「～てです」「～てどす」「～てだす」（テ形に助動詞デス・ドス・ダスの接続した形）とその活用形、「～てや」「～てじゃ」「～てぢや」（テ形に指定の助動詞ヤあるいはジャの接続した形）、が検索できる。ここで問題となるのは、小西(2014)の挙げるテ敬語の活用形の可能性を網羅できていないことである。しかし、たとえば「～て。」の形などは多く検索され過ぎ、かつ、その中からテ敬語にあたるものだけを抜き出すのが大変困難であると思われたため、本稿では扱わないこととした。「～てから」「～ての」「～てん」「～てなら」「～てない」も同様の理由で省いている。もしそれらの語形からテ敬語にあたるものを丹念に探せば、テ敬語が今回検索できたよりも多く見いだされる可能性はある。

7) 「検索文字列」の、は[らりるれろんンっッつツ]　によって、ハルの活用形だけでなくヤハル・ナハルの活用形も合わせて検索できる。「なはい」については、は[いイ]を用いると検索結果が多くなりすぎてゴミ取りの手間が膨大となるため、別の検索文字列 [なナ][はハ][いイ]を用いた。

8) この結果に関しては、別稿を準備中である。

9) ナハルについては、命令表現も含めた数値である。

10) 「ごりがん」と「石川五右衛門の生立」の初出年は、『現代日本文學体系 21 岩野泡鳴 上司小剣 真山青果 近松秋江 集』（筑摩書房 1970）の年譜による。

11) 以下の例では、例文の前にカッコ書きで、【筆者　筆者の生年　筆者の出身地】を示す。

参考文献

楳垣実，1955，『船場言葉』近畿方言学会.

興津要，1974，「明治大正の風俗と敬語生活」林四郎・南不二男編『明治大正時代の敬語』明治書院，232-258.

奥村三雄，1951，「敬語表現の一形式」『近畿方言』10: 12-18.

奥村三雄，1965，「上方洒落本における文末敬語法」『岐阜大学研究報告（人文科学）』13: 1-11.

金沢裕之，1992，「明治期大阪語の「テ敬語」表現」『地域言語』4: 1-14.

金沢裕之，1998，『近代大阪語変遷の研究』和泉書院.

岸江信介・中井精一・鳥谷善史，2009，『大阪のことば地図』和泉書院.

郡史郎，1997，「大阪方言の特色」郡史郎編『大阪府のことば』明治書院，11-61.

国立国語研究所，2006，『方言文法全国地図 第 6 集』財務省印刷局.

小西いずみ，2014，「西日本方言における尊敬形「～テ（ヤ・ジャ・ダ）」の活用」小林賢次・小林千草編『日本語史の新視点と現代日本語』勉誠出版，417-400.

佐藤虎男，1972，「大阪府方言の研究（第 1 報）—豊能郡能勢町方言のチャ敬語法について—」『学大国文』15: 51-60.

進藤咲子，1974，「紅葉・露伴・一葉の敬語」林四郎・南不二男編『明治大正時代の敬語』明治書院，85-120.

田中章夫，1973，「近世敬語の概観」『近世の敬語』明治書院，7-28.

辻加代子，2009，『「ハル」敬語考』ひつじ書房.

辻村敏樹，1974，「明治大正時代の敬語概観」林四郎・南不二男編『明治大正時代の敬語』明治書院, 8-33.

土屋信一，1986，「浮世風呂・浮世床の敬語二題—「なはる」と「てでございます」と—」『香川大学国文研究』10: 54-61.

中村明，1974，「白樺派文学の敬語」林四郎・南不二男編『明治大正時代の敬語』明治書院，163-196.

林四郎，1974，「鷗外・漱石・藤村における敬語行動」林四郎・南不二男編『明治大正時代の敬語』明治書院，121-162.

彦坂佳宣，1984，「近世後期上方語資料としての雑俳」『文芸研究』107: 45-57.

飛田良文，1974，「明治初期作品の敬語」林四郎・南不二男編『明治大正時代の敬語』明治書院，37-83.

藤原与一，1978，『方言敬語法の研究』春陽堂.

村上謙，2006，「近世前期上方における尊敬語表現「テ＋指定辞」の成立について」『日本語の研究』2(4): 17-32.

村上謙，2009，「近世上方における尊敬語化形式「テ＋指定辞」の変遷」『日本語の研究』5(1): 1-14.

村上謙，2010，「明治大正期関西弁資料としての上司小剣作品群の紹介および否定表現形式を用いた資料性の検討」『近代語研究　第 15 集』武蔵野書院，428-413.

村上謙，2014，「近世後期上方における待遇表現化のコロケーション」『日本語学』33(14): 152-161.

村中淑子，2015a，「明治小説にみる京都方言—清水紫琴「心の鬼」（明治 30 年）を資料として—」『現象と秩序』2: 173-190.

村中淑子，2015b，「大阪方言におけるナサル・ナハル・ハル等の変遷について—幕末期から織田作までの予備的検討—」『地域言語』23: 1-14.

森田良行，1974，「荷風・潤一郎・春夫の敬語」林四郎・南不二男編『明治大正時代の敬語』明治書院，197-229.

矢野準，1976a，「近世後期上方語資料としての上方板洒落本類」『語文研究』41: 22-31.

矢野準，1976b，「近世後期京坂語に関する一考察—洒落本用語の写実性—」『国語学』107: 16-33.

矢野準，1978，「近世後期京坂語資料としての滑稽本類—尊敬表現を中心に—」『静岡女子大学研究紀要』12: 17-35.

山崎久之，1963，『国語待遇表現体系の研究　近世編』武蔵野書院.

山本淳，1990a，「近世待遇法の一形式「テジャ」について」『國學院雑誌』91(4): 41-63.

山本淳，1990b，「江戸戯作小説に現れる「テ＋指定」待遇表現をめぐって」『國學院雑誌』91(11): 43-66.

湯沢幸吉郎，1936，『徳川時代言語の研究　上方篇』風間書房.

湯沢幸吉郎，1954（1957 増訂版参照），『江戸言葉の研究』明治書院.

＊＊

【編集後記】

『現象と秩序』第 5 号をお届けします．巻頭の中恵論文は、日本の社会学では、中恵氏しか研究していない『ヒアリング・ヴォイシズ』研究（聴声研究）の論文です。ご堪能ください。2 番目の西澤ほか論文は、日本の社会学・心理学・障害学では彼らしか研究していない『視覚障害者の歩行訓練』に関する論文です。こちらもご堪能ください。このように、本誌に他ではなかなか見ることができない領域の研究論文が多く載ることは、編集子の喜びとするところです。これからも新領域の発掘に努めていきます。

次号には、吃音研究、車イスバスケットボール研究、ALS 在宅療養研究等が載る予定です。ご期待ください。

付記：『現象と秩序』は，国立国会図書館雑誌記事索引の対象誌なので、CiNii 等でも「論文単位」「論文著者単位」で検索が可能です。しかし、なぜか、全文の PDF ファイルの入手が可能であることは表示されません。検索エンジンの「窓」に「現象と秩序」と書き入れて頂ければ、すぐに全文 PDF ファイルにヒットしますので、お試し下さい。(Y.K.)

＊＊

『現象と秩序』編集委員会（2016 年度）

編集委員

樫田美雄　(神戸市看護大学)

中塚朋子　(就実大学)

堀田裕子　(愛知学泉大学)

編集幹事

松下晶季　(神戸市外国語大学)

坂根杏奈　(神戸市外国語大学)

平田菜津子　(神戸市外国語大学)

編集協力・印刷協力

村中淑子　(桃山学院大学)

『現象と秩序』第 5 号

2016 年　10 月 31 日発行

発行所　〒651-2103 神戸市西区学園西町 3-4

神戸市看護大学　樫田研究室内　現象と秩序企画編集室

電話・FAX）078-794-8074（樫田研）,e-mail:　kashida.yoshio@nifty.ne.jp

PRINT ISSN　：2188-9848

ONLINE ISSN　：2188-9856

http://kashida-yoshio.com/gensho/gensho.html